

2月下旬まで網走沿岸を埋め尽くしていた流水も3月に入ってから、その姿が網走水試の窓からは見えない日が続いています。札幌管区气象台が3月18日に発表した「北海道地方海氷情報」によるとオホーツク海沿岸の海水は、海岸から20～40km沖合にあり、低気圧の通過などに伴って、これからも網走を中心に離岸と接岸を繰り返すことが予想されています。

▼オホーツク海域では海明けを待って様々な漁業が開始されます。毛がに漁もその一つですが、「平成26年度かにかご漁業（けがに）の取扱い」が2月に決定されました。今年の許容漁獲量は、水産試験場によるケガニ資源密度調査の結果などを踏まえ、オホーツク海海域全体で前年比100トン増の1,300トン（オホーツク総合振興局管内は50トン増の650トン）となっています。許容漁獲量は2年連続で引き上げられましたが、資源密度調査の結果では甲長7cm未満の雄（H27年度以降に漁獲対象となるケガニ）が再び減少していることから、今後の資源動向には注意が必要です。

（ケガニ資源密度調査の詳細は網走水試HPの下記URLをご参照下さい。
<http://www.fishexp.hro.or.jp/cont/abashiri/section/zoushoku/mf7eo1000000ha8.html>）

▼オホーツク沿岸の太宗漁業である地まきホタテガイ漁業も、海明けを待って各地区で漁場整備が始まっています。漁場整備では、3～4年後に漁獲するための稚貝を放流する前に、昨年までの操業で取り残した貝を漁獲するとともに、ホタテガイの害敵であるヒトデの駆除を行います。このヒトデ駆除は、放流した稚貝の生残を高める重要な作業ですが、地まきホタテガイ漁場におけるヒトデの行動生態はよくわかっていません。そこで網走水試では根室海峡の漁場を調査フィールドに、本紙No.16でご紹介したバイオテレメトリー手法を用いたヒトデ類の行動調査を行っています。

▼昨年7～10月に実施した調査では超音波発信器を装着して放流したヒトデやホタテガイから90万以上の膨大な超音波信号データが取得でき、現在、鋭意解析を進めています。これまでの解析で、マヒトデ7個体の30日間の総移動距離は平均約140m、最も移動した個体は230mであり、同様の方法で調べたホタテガイの移動が平均約16mであったのに比べると、ヒトデの移動は遙かに大きいことがわかりました。また、マヒトデの移動は10日間の昼の総移動距離が約17mであったのに対して夜は同約53mで、昼と夜の移動に大きな差が認められています。

▼網走水試では残りのデータ解析を早急に進めるとともに、漁場環境（流向・流速、水温）との関連も精査し、地まきホタテガイ漁場でのヒトデ類の行動の詳細を明らかにすることにしています。また、昨年までに開発した海底の動画撮影装置を活用して、ヒトデの生息密度が放流ホタテガイの生残や漁場内での密度分布の変化に及ぼす影響を明らかにするなど、地まきホタテガイ漁場における効果的、効率的なヒトデ駆除や稚貝の放流方法の確立に向けた知見の集積を図ることにしています。